

中井正一をめぐりて

～ 貴志康一と九鬼周造～

文学部教授 馬 場 俊 明

深い闇のなかに閃光のように煌めいた近代思想家のひとりに中井^{まさかず}正一がいる。昭和のファシズムの嵐の吹き荒れるなかで、学問と思想の自由のために抵抗し、治安維持法違反で検挙され、京都大学を追われた美学者・哲学者である。戦後は、郷里の尾道市立図書館長として文化運動に献身し、羽仁五郎に創設まもない国立国会図書館初代館長候補に推されたが、政治的対立による人事抗争に巻き込まれて副館長に就任する。兼ねて、日本図書館協会理事長として「図書館法」の成立に死力を尽くしたが、1952年（昭和27）5月18日、この世を去っている。52歳の若さだった。鶴見俊輔が「才能の濫費」と惜しんだ。

中井正一は、「安芸の小京都」と呼ばれる広島県賀茂郡竹原町（現竹原市）の出身である。母千代は、そこから遠く離れた大阪の緒方産婦人科病院にて、1900年（明治33）2月14日、わが国初の帝王切開手術により男児を生んだ。かれは、初めてということで「一」を、母子の生命を救った産婦人科医緒方正清の「正」をとって正一と命名された。試みられたことのない帝王切開手術に賭けた母千代の「貴い決意」と執刀した緒方正清の「科学への信頼」との「大いなる偶然」が、その後の中井正一に「人類の幸福のために」という社会的使命感をもたらすことになる。

主要な業績は、1927年（昭和2）、「カント第三批判序文前稿について」で京都学派にデビューしてから、哲学史上の画期的論文とされた「委員会の論理」（『世界文化』、1936）を発表するまでのわずか10年足らずの1930年代に集中している。中井正一にとって、西田幾多郎をはじめ

とする百花繚乱の京都学派の「星や雲のなかを縫うように」して、酒を酌み交わし、論敵と火花を散らしたもっとも楽しい幸福な時期であった。その光と影の交錯するなかで、かれとめぐりあった本学に縁のある人物がふたりいる。貴志康一と九鬼周造である。

天才作曲家貴志康一は、父方の祖父が芦屋の富豪という恵まれた環境で育ち、神戸深江文化村でM・ウェクスラーにバイオリンを師事、旧制甲南高校中退後、ジュネーブに留学し、作曲、指揮を学ぶ。3度目のヨーロッパ留学で作曲家、指揮者として活躍し、帰国後、期待されたが、心臓マヒのため28歳で夭折している。

1931年（昭和6）、中井正一と貴志康一は、音楽の世界でもなければ哲学の森でもなく、新しい映画芸術の分野で出会う。このころ、中井正一はカラーフィルムの開発をしていた安藤春蔵ら友人とともに、わが国初の色彩映画をつくらうと意欲を燃やしていた。そのところに、貴志康一が3度目のドイツ留学にあたって、法隆寺を主題に音楽色彩映画を制作しようと貴志学術映画研究所を設立し、朝日新聞社の人脈を介して協力を仰いできた。法隆寺の撮影は、強烈な照明などで遺物を損傷するおそれがあるとして、国宝保存委員会が許可しなかったので頓挫するが、代わりに総天然色『海の詩』（構成辻部政太郎、音楽貴志康一）と前衛映画『十分間の思索』（構成中井正一）が制作された（中井正一「色彩映画の思い出」）。撮影は安藤春蔵があたったが、『海の詩』では、ロケ地の愛媛の漁師町にまで、中井正一とともに貴志康一も駆けつけている。

作品は、学者や映画人に公開されたものの、酷評としかいいようのないものであったが、貴

志康一は留学に持参し試写会で好評を得たとされる。ただ、残念なことには、かれの死後、この作品は行方不明となっているので、いま観ることはできない。

おなじころ、本学図書館2階に個人文庫が設けられている九鬼周造と出会っている。

九鬼の父は、文部少輔（事務次官）、帝国博物館長などを歴任した官僚で男爵の九鬼隆一である。

父隆一は、文部省任官当時から岡倉天心に目をかけ、後援者であった。その天心と恋に落ちたのが周造の母である男爵夫人だった。幼少年期の周造が天心からうけた影響は少なくない。日本の美と文化の様式を解明した『「いき」の構造』（1930）にその影をみることができるだろう。

九鬼周造は、ドイツでハイデガーに学び、帰国後、京都大学に招かれる。京都大学では、わが国における最初のハイデガー世代として「存在と時間」を講義していた。そのころ集团的実存的性格の美に関心を寄せていた中井正一が講義に深い共鳴を覚えたのはいうまでもない。以後、私淑してやまなかった。だがまもなく中井正一は、新村猛や真下信一らとともに同人誌『世界文化』『土曜日』の活動が治安維持法に違反するとして検挙される。

教え子のとらわれてなき家訪えば比叡の山は
冬空にすむ（『巴里心景』）

九鬼が中井正一を思い遣って詠んだ歌と伝えられている。中井の家は、窓から比叡を仰ぎみることできた洛北の地にあった。

このように、美学者中井正一は、貴志康一と九鬼周造にめぐりあっているのだが、同時代の状況は、国家権力のもとに導かれた思想によって変化が生じていた。中井が大衆週刊誌『土曜日』（no.13, 1936.7.17）の巻頭言に「生きて今此処に居ることを手離すまい」と書いたのはそのころであった。

中井は、読者である市民にたいし、「日々の営みが不自由になり、単調となってくると、考えること、楽しむことすらもが一つのコースを繰返し」はじめる。それは「大きな危険を孕んでいる」として、次のように問いかける。

自分の生れて、今、此処に生きていること、その未来の正しさへの批判を放棄して来ることである。その生活の中の歪みと、その虚しさに慄然とした関心を日々の忙しさに棄て込むことである。

そしてやがては、友愛への寂しい利己的な限界を自分に言聞せ、精神の明晰な探求を誤魔化すことを言いふくめ、生活への怯懦を合理化する術を憶えることである。そして、それは自分には無意識に、自分達の明日の幸福を見失うとともに寧ろ明日の不幸に自らを手渡しすることなのである。

この中井の危機意識は、いま、閉塞された状況に状において、ともすれば時流に投じ、ややもすれば権力に追従しようとするわれわれ読者にむけられた切実な問いでもあるような気がする。あえて引くことにした。

歴史はくりかえすのか、それとも理性的発展を遂げるのか、それは、いま生きているわれわれ自身がきめることである。